

## あしあと

日本人の間に最も親しまれている仏は**観音さま**、観世音菩薩でしょう。観世音とは人々の救いを求める音声を聞くと、**直ちに現れて救済する**という意味だそうです。極楽往生を願う者の臨終には、阿弥陀如来のお伴をして、両手に蓮台をささげ持って迎えに来てくださるそうです。

神戸在住の画家**丸山寿美**さんは、観世音菩薩の絵を一心に画き続けておられます。展覧会を二度、三度と観に行きました。この仏の包み込んでくれるふくよかな笑みと眼差しは、どうみても女性です。命を育む母性の限りない優しさと結びついて、仏の慈悲が表現されているのでしょう。丸山さんの詩を二つ紹介します。

仏さま 貴方と会っていたら 元気が生まれます  
心の悲しみが うすらぎます 感謝の言葉 つぶやきました

悩みもあり 哀しみもあり 幸せも 喜びも 数々あれど  
仏はいつも 私のまわりを **ただ 静々と 通り過ぎてゆき**  
何をか語らん 何をか告げん 知りたくて 悟りたくて  
ただ一心(ひたすら)で **またも 仏の後を追う**

感性を静かに研ぎ澄ませて、何もおっしゃらない仏さまから、一人一人が**慈悲を感じ取っていく世界**なのですね。

教育 TV の番組「こころの時代」で先月放送された、岩手県大船渡の医者**山浦玄嗣**(はるつぐ)さんの「**ようがすひき受けだ**」も感銘深いものでした。山浦さんは地元の気仙の方言**ケセン語**で新約聖書の福音書を原典から翻訳し直して出版したことで以前にも TV で紹介されました。山浦さんは教会の受難週のお礼で、**ケセン語訳の聖書**を朗読していました。

大船渡では 80 才以上の方は今回で **3 度も地震・津波被害**にあっておられるそうですが、「**なんしてこんな目にあったんだべ**」と恨みごとを言う人が、一人もないそうです。なぜか。山浦さんの答は「人生には**死も災難も**必ず起こる。でもイエスさまは、災難を天罰と思うなとおっしゃった。人は**神さまの愛のふところ**で生きているのだから、天罰ではない」でした。

神さまは私たちを用いてご自分の恵みの業を進めていらっしゃる。だから「**聞け**」とお

っしやる。祈りとは神をほめたたえ、神さまに聞いていくことだ。自分は何をすべきかを懸命に聞いていくと、「お前にはこれをしてもらおう」という声が聞えてくる。そこで「ようがす。引き受けます」と行動を起こす。これが山浦さんの生き方なのですね。

私たちは、この世界を創造された全知全能、永遠なる神さまを信じます。神さまは、はっきりとご自分の心を語り掛けて下さいます。聖書に記された神の言葉、とりわけイエス・キリストの全生涯を通してはっきりと語って下さる命の言葉を読み、聞き取り、応答していくことができます。

私たちは、ごく限られた時間しか生きられず、ごく限られたことしか出来ません。明日のことも何が起こるかを知らない者です。私たち夫婦には5人の子供が居ますが、5人の家を同時に訪ねることはできません。しかし神さまは、世界の何処にも居て下さいます。世界中の人が同時に祈っても、どの人の傍らにも居て、祈りにちゃんと答えて下さるお方です。

多くの人に愛唱されている詩 M パワーズ原作「足あと」をご紹介します。

“ある夜 わたしは夢を見た 神さまと二人並んで 砂浜を歩いていた どの場面にも 二組の足あとが残されていた 一つは私の足あと もう一つは神さまの足あと しかし人生の終りの場面で振り返って見たら ある所だけ 足あとは一組しかなかった それは私が一番つらくて悲しい時だった 「神さま どうして 私だけだったのですか」 「わたしの大切な子よ わたしはお前のそばを離れたことは一度もない ましてお前が苦しんでいる時に あの時はお前を背負って歩いていたよ”

キリストの弟子たちが「神さまをお示ください」と尋ねました。「わたしを見た者は、父を見たのだ」。神さまのお姿は私たちの理解を超えています。そこで神さまは、ローマ皇帝アウグストの時代に、ベツレヘムの馬小屋で生まれ、エルサレムで十字架の刑死を遂げたイエスという人物となって歴史の中にご自分を現して「わたしを見た者は、父を見たのだ」とおっしゃったのでした。

神の愛の究極は十字架の死に現されました。最も重い刑罰を我が身に引き受けて死に、どんな罪でも贖って、すべての人を天の御国に迎える道を開いて下さいました。十字架こそ神さまの本質である真実の愛を表すキリスト教信仰の核心です。

“だれがキリストの愛から私たちを引き離すことが出来ましょう” 聖書